常識をひっくり返す「寅さん」

何だか8月というと、「寅さん」を思い起こす。「寅さん」を演じた名優・渥美清さんが1996年8月4日に68歳で亡くなったからだ。あのときの衝撃は今も忘れられない。山田洋次監督も朝日27日朝刊で表題のように綴っている。

今日、8月27日は「寅さんの日」と言われるそうです。1969年のこの日、映画『男はつらいよ』の第1作が公開されたから。

あの日は封切り日なのに、僕は映画館に行かず、団地のわが家で寝っ転がってテレビを見ていました。僕が脚本を手がけたテレビドラマ『男はつらいよ』を会社の反対を押し切って映画化したものの、試写を見ると、喜劇なのに笑えるところがどこもない。周りのスタッフも誰も笑わない。そもそもスタッフできばえを真剣にチェックしているので笑わないものなのですが、僕は当代一代のコメディアンを使いながら、笑えない変にまじめな映画をつくってしまったと思いました。「監督としておしまいだ」と打ちひしがれていたのです。

ところが、その日、プロデューサーから「何してる、すぐ劇場に来い」と電話がかかってきました。「客がいっぱい入って、みんな、大笑いしているよ！」

急いで新宿の映画館に行きました。場内に入ると、観客がクスクス笑っている。時々どっと笑い声が起きる。僕はびっくりした。この映画は笑えるんだ。喜劇になっているんだという驚きと発見。その日、観客の笑い声の中でわかったことは、映画のどこが面白いかは観客が決めることだ。僕は一生懸命まじめに寅さんをつくればいいのだ、ということでした。

寅さんを見ていると、みんな、気が楽になるという。既成の価値基準、モラル、約束事、上下関係などややこしいことから解放される。ごちゃごちゃでめちゃくちゃで何でもあり、というふざけ切った世界が寅さんの周りにフワッと立ち上がる。

どんな権威も社会的地位も寅さんにとっては値打ちがない。彼は誰とも仲良くなる。「お兄ちゃん、まじめに働かなきゃダメよ」というさくらの説教に大まじめに反省したかと思うと、一夜明けて美しい女性に会えば、コロリと忘れ、恋ひと筋になってしまう。彼女次第で自分の価値観はコロコロ変わっていく。この男に会うと、正しいと思っていたことは不正になり、不正だったことが正しいことになったりしてわけがわからなくなる。つまり、寅さんには常識というものをひっくり返してしまう、ハチャメチャな自由がある。

この不思議な魅力，それは渥美清という俳優が発した力です。渥美さん自身が自由だったからこそ出せたもの。寅さんは渥美清から誕生し彼とともに生きてきたのです。

（2022年8月31日）